

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520420

研究課題名(和文) 近世節用集の規範意識に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A basic study of normative consciousness in Setsuyōshū
published in the Edo period

研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA TAKASHI)

熊本県立大学・文学部・准教授

研究者番号：60273554

研究成果の概要(和文)：

これまで注目されていなかった江戸初期写の諫早文庫本節用集と元和6年写の色葉集の調査を行い、前者には語彙的な面に、後者には語彙的な面と音韻的な面とに、それぞれ九州方言が反映していることを明らかにした。また、文書・書簡用語を増補する節用集諸本の刊行は元禄8年頃からであるが、それらの諸本に近い編纂方針の辞書が元禄6年には刊行されていることを明らかにした。これらの調査に関連し、節用集研究に重要と思われる節用集3本の画像をweb上に公開した。

研究成果の概要(英文)：

This research was focused on the policy of the editors of the Setsuyōshū and the other dictionary of the same age. The following are the result.

- (1) Isahayabunko-bon Setsuyōshū and Irohashu, those are the manuscript versions dating from the early Edo period, have the Kyushu dialect vocabulary. In the latter the features of the dialectal phonemes are seen also.
- (2) The Setsuyōshūs, which have the special terms used in letters and documents, date from 1695 (Genroku 8). But it was found that a dictionary which has the same policy of them was published two years earlier, in 1693.

In addition, the images of the 3 Setsuyōshūs, which are important in the study of Setsuyōshū, were placed on my website.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：節用集 色葉字 色葉集 字尽 仮名遣 字体 語彙史

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、江戸期に刊行された節用集は、同書名で刊年を異にするものを別に算定すると、のべ500本強が知られていた。こ

のうち、近世文学の注釈や、日本語史研究における語彙や漢字表記の調査にもつぱら参照されるのは影印と索引が備わる『易林本節用

集』『合類節用集』『新刊節用集大全』『書言字考節用集』である。近年は国会図書館亀田文庫蔵本や東北大学狩野文庫蔵本のマイクロフィルム、亀田文庫蔵本を中心とする節用集諸本の影印図書集成が刊行されており、江戸後期を覆う調査においては、上記4本に加え、各調査対象に近い時代の節用集が参照されているようである。しかし、参照した節用集について、同時期の節用集であるという以上の選択理由が言及されることは少ない。多くの節用集を簡便に参照できるようになった一方で、各々の節用集が有する時代性や規範性の吟味はなお十分ではないものと考えられる。

2. 研究の目的

上記の認識から、本研究は、江戸時代に多数刊行された節用集諸本に掲載の語形や仮名遣、漢字表記が総体としていかなる幅を有しているか、及び、それぞれに同類の記述を有する節用集がどの程度刊行されているのかを調査することで、節用集が辞書として示す同時代的規範を明らかにし、以て、節用集の国語史資料としての位置づけを明確にすることを目的として企図したものである。

3. 研究の方法

上記2に基づき、基本的に下記の作業を実施し、データの蓄積と分析、及び節用集画像の公開を進めていった。

- (1) 幕末までに書写・刊行された節用集諸本の書誌調査と画像データの蓄積
- (2) 幕末までに書写・刊行された節用集リストの作成及び、リスト掲載各本における語形・仮名遣・字体等の総合的分析
- (3) 節用集研究上で重要と見られる刊本の選定とweb上での公開

4. 研究成果

上記3の方針のもと、調査を実施していったが、本研究とは別の立場から、2009年3月と2010年5月に、600本程を掲出する近世節用集の網羅的リストが公開されたことから、本研究に拠るリスト作成の重要性が低下することとなった。また、調査対象とすべき諸本が当初予定の500本強からさらに100本近く増加することとなったため、(2)の総括を行うためには、さらなる追加調査が必要となった。

一方、本研究の遂行過程で、これまで日本語学研究の場では言及がなされていなかった古本節用集2本（長崎県諫早文庫蔵本・大分県臼杵図書館蔵本）と、イロハ分類のみの語彙集である色葉集（仮題、元和6年写）1本（3本とも九州地方に伝来のもの）を見出

した。この3本の所収内容を検討する中で、近世前半期までの辞書に見る地域性の有無、文書・書簡用語の所収の有無、の2点から、節用集と他の古辞書との規範意識の相違の一端を提示することが可能ではないかとの認識に達した。

そこで、2009年度途中より、(1)(2)の進捗のために新規に調査が必要となった近世節用集100本程のデータ補充を順次進める一方、研究成果の公開は、上記3本の古辞書を念頭においた調査結果を優先して行うこととした。具体的には、次の3点の成果を、雑誌論文と学会にて発表した。

以下、順に3点の要点を記し、今後の展望を記すこととする。

(1) 諫早文庫本節用集に関する研究

本書は、「伊勢」を冒頭に置く所謂「伊勢本」系統に属する古本節用集である。イロハ各部を示す万葉仮名は、「油」(ユ)こそ饅頭屋本節用集一本と共通するのみであるが、他の用字は伊勢本の原本に近いとされる正宗文庫本に近い。また、意義分類の構成も同様に正宗文庫本に相近い。

ただし、通常の節用集で「言語(進退)」とする門名を「虚」とする点、及び、通常の古本節用集ではヲ・エ部に一括されて見出語を掲出しないオ・エ部にも若干の見出語を掲出する点に特徴が存する。特に前者は、他の古本節用集に類例を見ない。門名「虚」の存在は、『聚分韻略』の意義分類にある「虚押」を承けたものと見られ、本書が、韻書の意義分類が意識されるような場において編集されたことを端的に物語る。本書独自の増補と見られるオ部の見出語と注文のほとんどが『聚分韻略』に見えることもその証左の一つとなる。したがって、本書は、韻書の書とされる古本節用集の典型にはずれる伝本ではないものと見える。

しかし、所収語の面から見ると、本書は、古本節用集諸本中に見ることが稀な方言語彙を掲出するという特徴を有する。具体的には、「玄樹(ゲズ)」(カラタチのこと)、「夜明苔(キクチノリ)」(川海苔の一種)、「時魚(エツ)」(筑後川等の汽水域に生息する魚名)、「菩薩(エツ)」(雑草のホタルイのこと)等であり、これらは、貝原益軒の著作や『物類称呼』の記述、現在の方言分布を勘案すると、いずれも当時の九州方言と推測される。したがって、本書は、諫早に伝存するというだけでなく、内容の面でも九州との深い関係を有する節用集といえる。畿内以外の地域性が明確に反映しているという点では、古本節用集の中でも希有な伝本と位置づけられるわけである。

(2) 元和6年写『色葉集』に関する研究

本書は、元和6年に「高知尾庄」（現在の宮崎県高千穂地域）で書写された旨の奥書を有するイロハ分類体の辞書である。冒頭近くに享保年間の所持者「西元之丞」や「西喜内」の名が記され、両名とも『宮崎県史』所収の近世文書に在延岡の牧野家家臣としてその名が見えること、また、西氏は中世に高千穂地域を支配した三田井氏の傍流の子孫であることから、この奥書の記載は信憑性が高いものと考えられる。

本書の特徴は、「笈(カルウ)」「蜘蛛(コブムシ)」「荷(カタムル)」等の九州方言が存するほか、「通(カユウ)」「利口(リクウ)」「注夏(テウケ)」のようなオ列・ウ列の交替表記例が多数見られることである。後者についていえば、オ列→ウ列の交替例がウ列→オ列の交替例よりも圧倒的に多い。周知の通り、『日葡辞書』には西国九州地方の方言を「X(Ximo)」注記を付して掲出することが少なくなく、また、ロドリゲス『日本大文典』では九州方言の特徴としてオ列音のウ列音化等が言及される。本書は、キリシタン資料が語る1600年前後の九州方言の姿を補完する資料として極めて貴重な書物と考えられる。また、同じく宮崎県の日向地方出身の学僧日我の永禄2年写『いろは字』は、方言資料としてはそれほど注目されていないようであるが、影印本の解説が夙に言及する同書の「蝸牛(ツブナメ)」が本書にも見えることから、両書の記述が相俟って、『日本言語地図』に見る九州地域の「ツブラメ」を同時にさかのぼる語形と確定できる。

江戸初期までの古辞書で、所収語や語形に編纂（乃至は書写）地の地域性が言及されてきたものには、『いろは字』の他に、『運歩色葉集』（元亀二年写）、亀井本『和名集』（慶長二十年写）、米沢文庫本『和玉篇』（室町後期～江戸初期写）等が存するが、先に述べたように、古本節用集にはその事例が少なく、色葉集や和名集に多くの事例が見られるという傾向が看取される。古本節用集の辞書としての規範性の有り様をここに見出すことができるのではなからうか。

(3) 元禄6年刊『寺子節用福寿海』に関する研究

本書は、冒頭にイロハ分類体の語彙集、次に「一」「百」「千」「万」を頭字とする名数語彙を掲出する、見出語数3450語ほどの辞書である。本書は、書名に「寺子」向けの辞書を謳うこと、意義分類を施していない（近世であれば）「字尽」と称される形式の辞書であるにもかかわらず「節用」を名乗ることなど、注目すべき点が多い辞書であり、編纂資料の検討が課題であった。

調査の結果、①「一」を頭字とする95語のうち、冒頭からの66語は万治頃初刊の

『両仮名雑字尽』に、以降の29語は元禄4年刊の『頭書大広益節用集』に掲出語順も含めて、極めて良く一致すること、②イ部とキ部の見出語のべ125語のうち、116語が上の2書で網羅されること、③『寺子節用福寿海』の頭書に掲載の図の多くが『頭書大広益節用集』に一致すること、などから、『寺子節用福寿海』の主要な編纂資料はこの2書と推定された。

また、『両仮名雑字尽』は「違背之輩」「詭置候」「相渡申候」のような文書や書簡に見る慣用句をそのままに見出語とすることがあるのに対し、『寺子節用福寿海』はそれらの句を、語の単位に分割して掲載することが多い。これは、意義分類を施さない「字尽」の形式を保持しつつも、一方の編纂資料であった節用集的な見出語掲出の方針を襲ったためのものと考えられる。

近世前期の節用集は、易林本節用集の所収語を多く受け継ぐものが主流であったが、元禄8年頃からは、文書・書簡用語を増補する節用集が多数刊行されるようになる。そして、それらの節用集には、『両仮名雑字尽』のような「字尽」が掲載するにふさわしい「相互申合」「相對仕」のような慣用句を見ることができるのであった。「字尽」と節用集との辞書本文の接近は、この時期に双方からなされ、交錯していたと見ることができるのである。

版本の節用集が、イロハ分類に忠ずる見出語右側の付訓に加え、それとは別の音訓を左側に示す、所謂「两点」形式を採用したのは、同じく「两点」形式を採る『両仮名雑字尽』よりも遅れるものと推測されている。内容面、形式面とも、近世前期の節用集の展開を考えるに際しては、今後、「字尽」との関係を含頭に入れて置く必要がある。

(4) 今後の展望

(1)と(2)で取り上げた2本の辞書はいずれも近世初期の写本と見られることから、同時期に九州で書写された古本節用集と色葉集とが方言の掲出等において如何なる相違を見せるかを検討する際の、好個の一対となる。各々の辞書について、その系統関係を検討し、独自の所収語や掲出語形を確認していくことで、両書の規範性の相違を明らかにすることもできるであろう。やや時代は下るが、『和漢音釈書言字考節用集』に見る東国語掲出、『和用類字』に見る東北方言掲出の実態なども視野に入れた検討を行う必要があるかもしれない。

(3)に関連しては、高橋久子氏が、「色葉字」と総称するイロハ分類体辞書のいくつかについて、「実務的な文書用語を意識的に収録しようとする姿勢が明らかに看取される」と指摘をしていることが注目される。『両仮

名雑字尽』を「色葉字」の系譜に連なる辞書と位置づけ得るのか、また、室町期以降の辞書史に元禄期の節用集の展開を、どのようにつなげていくことができるのか等も今後の検討課題となろう。

(5)その他

影印本やマイクロフィルムが無く、公的機関で原本を閲覧することも困難な、元禄8年刊節用集・寛延元年刊蠡海節用集・宝暦10年刊増字百倍早引節用集の3本の全面像をweb上で公開した。この3本はいずれも近世の節用集の系統関係を検討する際に重要であるだけでなく、近世の語彙研究や表記研究に際しても参照すべき価値がある節用集と考えている。今後、各研究機関における日本語史資料のweb公開の趨勢を勘案しつつ、順次公開点数を増加させていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

①米谷隆史 「寺子節用福寿海の編纂をめぐって」 『熊本県立大学 国文研究』第56号 2011年 (6月刊行予定 頁未定) 査読無

②米谷隆史 「資料紹介 諫早文庫所蔵の古本節用集について」 『国語語彙史の研究』(和泉書院) 29 2010年 191p~204p 査読無

〔学会発表〕(計1件)

①米谷隆史 「古辞書における方言掲載をめぐって—元和六年写『色葉集』を中心に—」 第六十回西日本国語国文学会 2010年9月12日 佐賀大学

〔その他〕

ホームページ

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~yny/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA TAKASHI)

熊本県立大学・文学部日本語日本文学科・准教授

研究者番号：60273554